

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19560651

研究課題名（和文） 伝統都市における祭礼空間の変容過程に関する研究

研究課題名（英文） A Study on Changing Process of Festival Space of Shinto Shrine in Traditional Cities

研究代表者

伊藤 裕久 (ITO HIROHISA)

東京理科大学・工学部・教授

研究者番号：20183006

研究成果の概要：

本研究では、伝統都市の祭礼空間（巡行路・祭礼拠点の構成など）が、都市空間の形成・改変に対して、どのような変容過程をたどったかを文献史資料と現状の祭礼調査によって解明するものである。主な調査研究対象として取り上げた江戸・東京の神田祭、福岡の博多祇園山笠では、とくに近代・現代都市化過程において、伝統的な祭礼空間が、断絶的な都市空間の改変を修復しながら連続的に変化することで、地域社会の歴史性の継承や地域コミュニティの持続・形成に重要な役割を果たしたことが明らかとなった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：都市史・建築史

科研費の分科・細目：建築歴史・意匠

キーワード：伝統都市、祭礼空間、変容過程、近代化、江戸・東京、神田祭、博多、祇園山笠

1. 研究開始当初の背景

東京理科大学工学部建築学科・伊藤研究室では、都市史・建築史研究の一環として、東京の都市祭礼を中心に、博多（福岡県）、高山（岐阜県）、富士吉田（山梨県）、川越（埼玉県）などの地方都市において、1999 年より継続して祭礼空間に関する調査研究を実施している。とくに、これまで、あまり重視されてこなかった都市祭礼の近現代の変容に注目しつつ、都市再生における現代の祭礼の意義

を空間的側面から再検討するための調査データを蓄積してきた。本研究は、それらの調査成果を総括しつつ、2007 年度、2008 年度の調査データを加えて比較検討することを試みた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、前近代に成立した伝統的な都市祭礼が、近現代都市において空間的に如何なる変容を遂げてきたかを具体的に明らかにすることによって、都市祭礼が都市空間形成に果たしてきた重要な役割を都市史

に位置づけるとともに、前近代から近代へと継承された祭礼空間の変容過程を媒介として、近現代における日本の都市空間構造の特質を解明するものである。とくに本研究では、巨大都市（東京）と地方中核都市（博多）を主な調査対象地として取り上げ、「神田祭」と「博多祇園山笠」という伝統的な都市祭礼が、近世から近現代に継承されることで、都市空間構造とコミュニティ形成に如何なる役割を果たしてきたのかを総合的に解明することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、研究室での既往調査データの蓄積を前提としながら、調査対象とする伝統都市を、(1)巨大都市である江戸・東京、(2)地方中核都市である博多、(3)歴史的町並を残した伝統的地方都市である飛騨高山・富士吉田・川越に区分し、さらに2年間に亘る総合的な調査研究、すなわち、文献史資料調査による復原的考察、現状調査による祭礼空間（巡行路・祭礼拠点の実測）の把握、を実施して具体的に相互比較することで、日本における伝統的な祭礼空間の変容プロセスの歴史的特質を解明する。

4. 研究成果

2007年度に東京の「神田祭」の祭礼拠点83ヶ所、2008年度に博多の「祇園山笠」の祭礼拠点18ヶ所の現状調査を実施し、データ・シートを作成し祭礼空間の実態が把握できた。また文献史資料調査によって近現代化過程に関する新たな知見を加えることができた。以下、東京と博多の比較について「結論」を述べる。

まず、江戸町人地の祭礼は、将軍上覧を目的に山車と神輿行列が武家地に入り込みながら、本町・本石町・河岸通・日本橋通などメインルートのみを巡行する「山王祭」「神田

祭」と、町人地の地域的な祭礼として横町まで宮神輿が廻る三つの「天王祭（祇園祭）」があり、山車を出す番付町あるいは氏子町には、これらの祭礼で重複がみられた。

近世における都市祭礼の重層性、あるいは氏子域の住民のための地域的な祭礼と将軍・藩主上覧を目的とした一大ページェント的な都市祭礼という点では、あくまで櫛田神社の氏子域である博多の町人地内を祭礼空間とした「祇園山笠」と、藩主の上覧を目的に福岡城下あるいは城内まで巡行した「松囃子」の対比、また両者の担い手となった「流」の重複、という点で共通性がみられる。

また山笠は、博多内に居住する町衆のためのものであると同時に、「飾り山」として鑑賞されるものであり、さらに「追い山」は、諸国より訪れる観衆のために広く開放された祭礼でもあった。このように地域社会の結束の紐帯となった祭礼空間が、同時に他者によって鑑賞される対象として成立したこと、その二面性こそが農村祭礼とは峻別される都市祭礼の特徴であろう。

祭礼組織では、江戸では、大伝馬町・南伝馬町など、近世城下町の形成において由緒をもつ限定された町の優位性（番付、御旅所など）が明確である。一方、博多では、催合当番や加勢町・流など周辺部と中心部での町間格差はみられるものの、原則として「流」の輪番制や当番町制が17世紀末には確立しており、町組を単位として町間の平等性を保つような特徴的な祭礼システムの形成がみられた。このことは、単なる祭礼組織の相違に止まらず、それぞれの伝統都市における町人地の日常的な地域コミュニティの性格の差異を表象するものと考えられる。

なお、博多祇園山笠の当番町制において注目すべき点は、山笠を飾る場所（当番町）が、長期間に亘って地域的な偏在を生じないように

考案された当番町のサイクルが存在した事実である。それは、流全体として祭礼の賑わいを享受するための都市空間の演出方法であったと考えられる。そこには、前述した都市祭礼としての特質が表れていると言えるだろう。

近代になると、東京では、明治5年(1872)に氏子域が一元化され、祭礼形態に大きな変化がみられた。その中で最も注目すべきは、神田祭が天王祭を取り込みながら、氏子域の町内を高密度に廻る新たな巡行路を明治後期から震災前後にかけて成立させる事実である。江戸から東京の近代化過程において最も重要な課題は、都市空間の七割を占めた旧武家地の市街化に対して地域社会をいかに統合していくかであり、そのために神田神社の祭礼は、旧武家地を取り込みながらダイナミックに変貌するのである。

博多では、「七流」という江戸期に定着した伝統的な祭礼単位の構成が継承されるが、かつて太閤町割の結果として創出された「流」という町組は、その後の福岡城下町の発展によって、必ずしも都市社会構造の実態に対応したものではなくなりつつあった。祭礼は、都市建設の神話を可視化する一大ページェントへと変貌していったと言えよう。巨額の財政負担を強いる祭礼と現実の町の経済力との落差によって、徐々にではあるが「流」は内部から再編されていくことになった。また、明治政府など近代の公的権力からは、伝統的祭礼は、町財政を圧迫する封建的遺制みなされることで廃止・縮小される傾向がみられた。近代都市における祭礼空間の変容は、こうした近代的な公共の視線と新たな地域社会の生成によって方向付けられていくのである。

例えば、東京の壮麗な山車の巡行は、博多と同様に近代都市基盤の整備（電線架設や市電の開通など）によって、明治17年（1884）の神田祭を最後に、次第に姿を消していき、

むしろ神輿巡行が重要な役割を果たすようになった。さらに戦後は、各町で設えた町神輿が祭礼の主役となっていった。伝統的な祭礼空間のあり方を継承するために、昇き山とは別に飾り山を創出した博多とは異なり、むしろ東京では、神輿を昇くことに重点をおいた新たな地域社会の祭礼へと発展していくのである。

そこには、七流という近世に固定された祭礼組織が戦前まで存続した博多とは異なり、旧武家地を含めて新たな祭礼の担い手となった町会組織の広範な成立があったとみられる。それは近代化の差異であると同時に、近世都市の質の差異でもあった。つまり、江戸の祭礼は、家持町人の不在化によって、家守の管理のもとで様々な社会集団（商人・職人仲間）を介在させながら運営されてきた結果、逆に近代には、新たな住民を運営主体とした町会組織による祭礼形態へと比較的容易に移行しえたのではないかと考えられる。

また、近代における都市空間＝社会構造の改変では、東京においては、関東大震災後の帝都復興事業、とくに土地区画整理事業や幹線道路の新設による街区・街路構成と町界・町名変更が、祭礼空間や組織にも大きな変化をもたらした。しかし、祭礼自体はこの頃に最盛期を迎えており、断絶的な近代都市空間の再編に伴う地域社会の修復を、伝統的な祭礼が担っていたとすることができる。近代における伝統都市の再編に、都市祭礼が果たした役割は、極めて大きかったと言えるであろう。

博多では、戦災復興計画と昭和41年(1966)の町界・町名変更が同様な画期となった。その中で、祇園山笠は、神田祭に比較すれば七流の伝統的な姿を継承しているようにみえるが、実際は、道路拡張で消滅した旧流や戦前まで加勢として位置づけられてきた新興流を

吸収しながら東流・西流が成立し、戦後に加わった櫛田神社の氏子域外に位置した千代流・中洲流がその中枢を担い、各流の祭礼組織も、地域住民の実情に併せて個性化することで対応していた。また、舁き山と飾り山の分離は、商業施設や商店街など様々な事業主体による飾り山による参加を可能にし、祭礼における都市空間の演出を広域化・多様化しているのである。

一方、現在の神田祭における町内祭礼の拠点とは、東京都心部の再開発などの影響を受けて変動を続けており、必ずしも安定した状況にはない。しかし、地域コミュニティの形成拠点としての祭礼に対する評価は高まりをみせており、各町会の工夫を凝らした祭礼拠点が設営され、地域の個性がみられる様になっている。現代の都市祭礼は、大きく変貌していく都心の地域空間において、地域コミュニティの歴史を再確認しながら新たな人間・社会関係を取り結ぶ「場」としての役割を担い続けているのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

伊藤裕久「都市における祭礼空間の近代—近代都市の空間=社会システムの受容—」(『近代の空間システムと日本の空間システムの形成と評価』日本建築学会, 2007年8月、pp. 75~76)

[図書] (計1件)

高埜利彦監修、甲州史料調査会編、酒入陽子、小宮山敏和、西田かほる、青柳周一、澤博勝、田中潤、谷本晃久、伊藤裕久、山本英二、堀内真、菅野洋介、菊池邦彦『富士山御師の歴史的研究』山川出版社、2009年3月、全399頁

[その他]

2009年度の「神田祭」において2007年度の祭礼拠点調査データ・シートを各町会に配布。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 裕久 (東京理科大学・工学部・教授)
研究者番号: 20183006

研究協力者

栢木まどか (東京理科大学・工学部・助教)
杉山 経子 (東京理科大学工学部補手・当時)

調査協力者

岩瀬忠震・坂巻直哉・深川梓・佐々山浩・西口雄一郎・平出由美子・附田朋子・中島美由紀・森篤史 (東京理科大学大学院生・当時)、足達健司・石原悠人・大塚利恵・小野健三・鹿毛伸吾・土信田浩之・中谷文・三又由香・三村春治・森陽菜・森久保博・百瀬香織 (東京理科大学学部4年生・当時)